建設経済常任委員会
所管事務調査報告書

河川水害対策の取り組みについて

令和４年（2022 年）12 月 13 日

１．調査事件名

河川水害対策の取り組みについて

２．調査の目的

京田辺市は木津川に隣接し、また市内には木津川へ流入する複数の河川があり、その一部は「天井川」となっている。これらの河川は、農業用水としての利用など地域にも重要な役割を果たしているが、一方では、古くから増水や洪水、氾濫など水害への備えは重要な課題となっていた。

木津川をはじめとした市内河川の改修や管理は、京田辺市のまちづくりにとっても欠かせない課題であるとともに、その改修工事等は、場合によっては、数十年単位の長期的な事業となることもある。

そこで本事務調査では、まず市議会議員がこれらの河川管理、治水対策について研修し、知識と認識を深め、京田辺市の置かれた状況や、河川改修・管理、治水対策の現状をはじめとした諸課題について学び、把握した情報等を住民へ報告し、共有することを中心に取り組むものである。

３．調査の経過

①２０２１(R3)年　９月１７日　建設経済常任委員会　京田辺市執行部への質疑

②２０２１(R3)年１１月１７日　京都府山城北土木事務所で研修

③２０２１(R3)年１１月１７日　国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所で研修

④２０２２(R4)年　５月　９日　国土交通省近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所で研修

⑤２０２２(R4)年　５月１７日　国土交通省近畿地方整備局木津川上流河川事務所伊賀上野出張所で研修

⑥２０２２(R4)年　８月１５日　防賀川新西浜樋門整備、松井地域吉原川改修、の現地視察

・この他に各定例議会の委員会の際に、研修先、テーマなどを委員間で協議した。

４．調査の内容

①２０２１(R3)９月１７日　建設経済常任委員会　京田辺市執行部への質疑

執行部より事業説明を受けた後に質疑を行った。

執行部の事業説明では、「近年、雨量が増え浸水被害も増えている。国土交通省近畿地方整備局は２０２１(R3)年８月に淀川水系河川整備計画を変更し、木津川の稼動目標流量を１．１倍にふやす洪水対策や、堤防強化に着手した。京田辺市域の堤防強化工事は令和４年度には完了予定。また、国、府、市が連携して防賀川の新西浜樋門と田辺排水機場の一体的な整備も進められる。防賀川下流域では松井地域の吉原川等の合流部の改修がされ、２０２４(R6)年度の完了を目指している。この他に興戸地区内排水路整備事業にも着手していく。淀川河川整備の変更では、流域治水の考えから、あらゆる関係者が治水対策に取り組むものとされ、本市も積極的にやっていく。」と述べられた。

質疑では、新西浜樋門整備事業の目的や、市内における治水上の重点箇所、河川の浚渫などについてとり上げられた。

執行部からは「新西浜樋門について、いま現在の西浜樋門の排水量は６ｔ、防賀川の流下能力は４～６ｔで両方あわせても１０～１３ｔの流下能力しかないが、京都府の河川整備計画では、防賀川のその地点までの水量は２７ｔとなっている。今回の新西浜樋門の整備で、その水量に見合った流下能力を確保するもので、内水氾濫対策となる。市内全域での治水対策では、これの他に高木地区や山間地域の排水路整備などもある。

河川の浚渫について、２０２１(R3)年度に河川堆積土砂管理計画を策定し、２０２２(R4)年度から３年間で浚渫工事をすすめる。対象河川は、虚空蔵谷川、吉原川、天津神川、駒ヶ谷川、遠藤川、の５河川」と説明があった。

②２０２１(R3)年１１月１７日　京都府山城北土木事務所で研修

京都府山城北土木事務所を訪問し、事務所長、河川整備課長から、防賀川など京都府が管理している河川の状況や改修計画の考え方などについて、研修を受けた。そのポイントは以下の通り。

・防賀川について

昔は水が貴重で農業のために水路を細くして、下に流さずに使っていたという事情もあって、勾配もゆるくて、なかなか水が流れていかない珍しい川でもある。府が管理している防賀川などの中小河川では、降り始めから降り終わりまでの総雨量よりも、単位時間での時間雨量の方の影響が大きく重要になる。降ってきた雨水を単位時間内に流下させられる量は決まっており、その量を超える雨となると増水する。

木津川などの国の管理している一級河川では、流れ込んできた雨水がどれだけある

かという総雨量が重要となる。

・天井川について

治水とまちづくりの２つから考えることが必要。治水面では上流域で降った雨を下流域を通さずに直接、流すという面もある。仮に下流域で増水、浸水したとしても、上流域の雨をそこを通過して流せる。ただ高いところ、住宅の上などを流れているのは不安というのもある。また天井川は堤防もあるのでまちを分断することになる。

・気候変動とのかかわりについて。

ハード整備だけでは今の気候変動に追いつけない。これが流域治水という考えが出てきた背景の一つでもある。住民自身がどう取り組むのか。行政だけですべては出来ない。住民に何ができるか、考える事が大切。

・開発行為との関わりについて

市街化区域が増えると流量が増え、河川改修計画も変わる。川の幅は市街化区域がどれくらいあるかによって計画をつくっている。新たに市街化区域をつくれば、川の幅は変わらないから調整池が必要になる。

③２０２１(R3)年１１月１７日　国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所で研修

枚方市にある国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所を訪問し、「淀川の治水対策について」をテーマとした研修を受けた。そのポイントは以下の通り。

・近年の雨量の増大には、気候変動の影響があることについて

・江戸時代からの淀川の歴史、治水対策の歴史について

・木津川の土砂への流入、掘削などについて

土砂は３川合流地点付近で澱む。現在、３川合流地点より少し下流域で、今後３０年かけて３００万㎥の掘削が計画されている。それが終われば木津川の流下能力もかなり上昇する見込み。

④２０２２(R4)年５月９日　国土交通省近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所で研修

枚方市にある国土交通省近畿地方整備局淀川ダム統合管理事務所を訪問し、研修を受けた。そのポイントは以下の通り。

・ダムによる治水

降雨予測をして、雨のダムへの流入量予測をし、それを元に事前放水で容量を確保し、水が溜まってくればそれを流していく。淀川水域での複数のダムへの指示系統を洪水時に調整して指示する。この事務所で調整する対象は、国直轄の天ヶ瀬ダム（宇

治川水系）と、水資源機構が管理している日吉ダム（乙訓水系）、高山ダム、青蓮寺ダム、室生ダム、布目ダム、比奈知ダム（この５つが木津川水系）、の７つで、他に現在建設中の川上ダムが加わる。

・ゲリラ豪雨等への対応

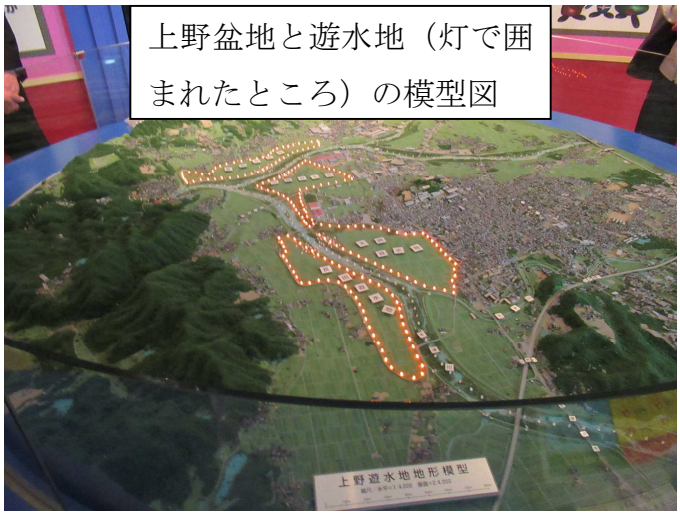
ダムは狭い地域での突発的なゲリラ豪雨にはきかないが、台風には有効に働く。近年、台風の雨量もかつての１．４倍になっているという指摘もある。ダムが多くなれば累計雨量への耐性が上がるというものでもない。ダムの限界はある。それで近年はプッシュ型通知などのソフト対策も重視し、安全に逃げる、避難できるようにしていくことも大事。

⑤２０２２(R4)年５月１７日　国土交通省近畿地方整備局木津川上流河川事務所伊賀上野出張所で研修

三重県伊賀市にある国土交通省近畿地方整備局木津川上流河川事務所伊賀上野出張所を訪問し、研修を受けるとともに、上野遊水地の現地視察を行った。そのポイントは以下の通り。

・木津川上流河川事務所について

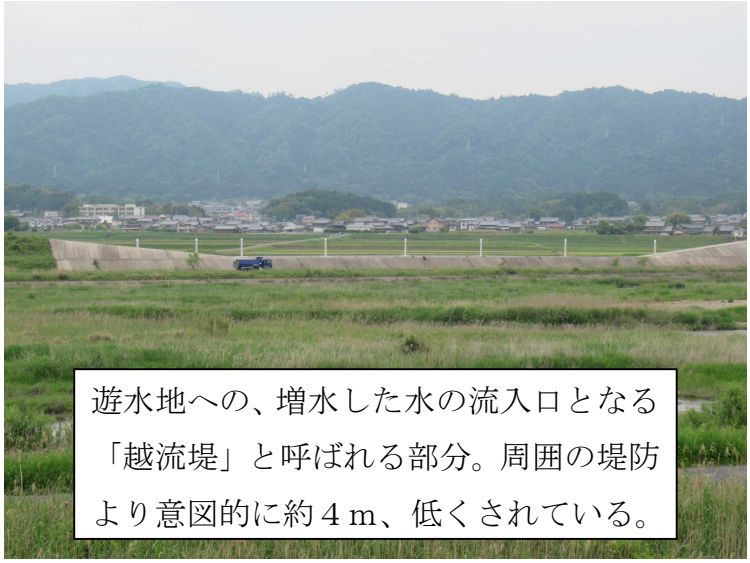
木津川上流河川事務所が管理しているのは、笠置町より上流部の木津川流域と名張川流域で、幹川流路延長は１１０．４６ｋｍ。この流域全体での治水プロジェクトをハード、ソフトの両面でしている。ハード面で進めているのは、名張市の引堤計画で、これは河川の堤防を引き下げる＝河川の拡幅をするもの。



上野盆地と遊水地（灯で囲まれたところ）の模型図

・上野遊水地整備について

上野盆地は、木津川が南から下ってきて、柘植川、服部川が合流してきてから、上野盆地の西側にある岩倉峡を通って京都府域に流れていくが、岩倉峡は川幅が約６０ｍと狭く、それが５ｋｍくらい続くので、流量が少なく、木津川の水がたまり古くから水害の起きる地域。


遊水地への、増水した水の流入口となる「越流堤」と呼ばれる部分。周囲の堤防より意図的に約４ｍ、低くされている。

岩倉峡のような狭窄部だけを直すと、下流域に流下する水量が増大し、下流での増水、洪水などが生じかねない。河川改修は下流域から改修していくのが大原則だが、それまで上流域は何もできない、ということでもない。下流に負担をかけずに上流域で出来る対策として、１９５３(S28)年の台風１３号の規模に耐えることを目標に遊水地計画がつくられ、１９６９(S44)年から工事着手。遊水地関連本体の事業が２０１５(H27)年に完成した。

遊水地となる地域は４つあり、合計面積は２４８．５ｈａ（すべて田畑）あり、９００万ｔの水をためることができる。２０１５(H27)年から運用を開始し、それ以降、遊水地に水が入ったのは２０１７(H29)年の台風２１号の時で、６００万ｔの水をため、推計で約１６０ｈａ、７６０戸の浸水被害を防止できたことになる。

⑥２０２２(R4)年８月１５日　防賀川新西浜樋門整備、松井地域吉原川改修、の現地視察

拡幅予定の防賀川からの放水路

市内の防賀川改修にかかわる現地視察として、田辺北地域の新西浜樋門整備・田辺排水機場更新事業と、松井地域の防賀川・吉原川合流部改修事業の現地視察を行った。そのポイントは以下の通り。

・新西浜樋門整備・田辺排水機場更新事業の概要

田辺農業排水機用ポンプの更新、新西浜樋門建設とそこへの防賀川から木津川への放水路を整備する工事。工事としては、①現在の防賀川から現西浜樋門への放水路を１２ｍへ大幅に拡幅し、現西浜樋門までの水路は廃止して、新西浜樋門までとする。②拡幅１５ｍの新西浜樋門を建設、③田辺排水機場の建替え、になる。１１月に着工式予定で、２０２６(R8)年度末までの４年間の事業計画。

馬坂川防賀川合流地より下流側の流下処理能力が向上し、西住宅、東住宅のそれぞれの北側周辺での浸水回避や、田辺北区画整理事業地域での浸水回避が期待される。

・吉原川改修について

防賀川、虚空蔵谷川、吉原川の三川合流地点の、京都府による改修工事はほぼ完了しており、今後、吉原川の松井グランド辺りから三川合流地点までの下流域２３５ｍの拡幅工事を進めていく。これにより流下処理能力は毎秒５ｔから１１ｔへ向上する。２０２２(R4)年秋の渇水期から工事に入り、２０２４(R6)年度に完成予定。

５．まとめ

当初は、近年に河川氾濫などの水害を経験し、それを踏まえた対策などに取り組んでいる地域などの現地を視察する管外視察研修も計画していたが、あいにくのコロナ禍のために見送らざるをえなかったのは残念であった。

今回の所管事務調査では木津川や防賀川を管理する国、京都府への研修や、市内河川の現地視察を行った。その中で、改めて木津川を含む淀川水系の治水対策の現状や、防賀川などの現状やその特性などについて研修を深めることができた。

また研修の中で、近年の気候変動の影響で、従来の想定を上回る総雨量をもたらす豪雨や、短時間で集中的な豪雨が数多く発生することについて、それらに起因する水害の被害を防ぐには、ダムや堤防、河川改修などのハード面での整備だけでなく、早めの避難などのソフト面での対策の重要性についても触れられた。

以上のことをまとめとして、報告とする。